

春をめぐる昔と今

神戸女学院大学非常勤講師 東野泰子 ひがしの やすこ

一 春は名のみの風の寒さや

どう考えても冬の真っ最中で寒いのに、どうして春というのだろうか…。正月を新春、初春ということが子どもの頃は不思議でならなかった。いつのまにか不思議と思わなくなったのは、古典文学を学んだからというより、現代の生活習慣としてなじんでしまったのだと思う。現代の生活で旧暦を意識する機会などめつたにないが、改まった気分になる正月は、誰しも、「正月〓物事のはじめ〓春」ということをすんなり受け入れている。

旧暦の一月一日は現在の暦の一月末から二月のはじめ、立春はだいたい二月四日ごろで、寒さの頂点である。いにしえの人々も立春の歌を詠みながら寒かっただろう。そう思いながら古今和歌集をみると、春上巻の巻頭歌はよく知られた、

年のうちに春は来にけりひととせを
去年こぞとやいはむ今年とやいはむ
という、在原ありはら元方の年内立春の歌である。理屈っぽくて風情がないように思えるが、

まともな暖房もなく底冷えする中で、じりじりと春を待っていた当時の人にしてみれば、年が明けていないのにもう春が来た！という喜びがあったのだろう。

古今和歌集のような勅撰和歌集では、時間の経過にしたがって和歌が配列される。立春の歌のあとには、季節の推移を追って春の歌が並べられており、三首め以降九首めまでは雪が詠み込まれている。一例をあげるなら、第七首め、読人しらず歌は、

心ざし深くそめてしをりければ
消えあへぬ雪の花と見ゆらむ
と、雪の消え残る中で花を待つ歌である。心ざしを深く染めるというところに、寒さをこらえつつ花をじっと待つ早春の風

情がある。「春は名のみの風の寒さや」唱歌『早春賦』というように、寒さもまた、春の季節感である。

二 さくらの歌と古典のことは

古今和歌集の春上巻では、雪の歌のあと、鶯、若菜、柳の歌などが数首ずつ、そして梅の歌十七首が並ぶ。我々も梅の花が咲くと、春はもうそこまで感じるものの、現実にはコートが脱げない寒さで、気分はまだまだ冬である。ああ、春が来たと実感できるのは、三月下旬になって気温もやや上がり、さくらの便りが聞かれるころだろうか。

いにしえの人々も、やはり春は何よりもさくらであつたらしく、梅の歌のあとは春上巻から下巻にかけて七十首のさくらの歌がつづく。現代も毎年のようにさ

くらの歌がヒットチャートを賑わせること、古今和歌集の時代とかわりがない。現代人もさくらには特別な思い入れがあるのだろう。けれども、やはり、さくらというと、古今和歌集以来の伝統文化をどこかで意識するようである。

松任谷由実の「春よ、来い」の歌詞には文語のことが使われている。

春よ 遠き春よ 暎閉じればそこに
愛をくれし君の なつかしき声 がする

「遠き」「なつかしき」は文語における形容詞の連体形、「愛をくれし」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形である。この歌ではほかに「淡き」「溢るる」「まだ見ぬ」など、「J-POP」といわれるジャンルの歌詞としては珍しく、文語のことが多用する。これは松任谷由実がもともと持っていた古典的な感性のあらわれであろう。また、この歌のみならず、いきものがかりの「SAKURA」にも文語のことはつかいがみえる。

君と春に 願ひしあの夢は
今も見えているよ さくら 舞い散る

「見えているよ」の「よ」という、非常に現代口語的な終助詞と同時に、「願ひし」と過去の助動詞「き」の連体形が使われているところが興味深い。「SAKURA」の場合は「春よ、来い」に触発された面があるが、それにしても、さくらという題材は、現代人の古典的な感性を呼びさますようである。

三 さくらとノスタルジー

現代の詩文にも、打消の助動詞「ず」、その連体形「ぬ」、動詞の命令形「せよ」「あれ」などが使われることがある。「春よ、来い」「SAKURA」の場合、象徴的なのは過去の助動詞「き」の連体形「し」が使われていることである。現代のさくらの歌は、過ぎた時間を思い、なつかしむものが多い。「春よ、来い」も「SAKURA」も、ふかやま福山雅治「桜坂」もケツメイシ「さくら」も、歌詞に登場する「君」は、今はそばにいない。これ

らの歌の中では、さくら舞い散る風景の中に、かつての「君」の姿が思い出し立ち現れてくるのである。

古今和歌集では、梅花の香りや橘の香りに昔の人を思い出す。

人はいさ心も知らずふるさは
花ぞ昔の香ににほひける (春上)
五月まつ花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする (夏)

現代ではさくらの季節と卒業入学期の時期が一致しているため、人と出会い別れた記憶とさくらとが強く結びついている。さくらは毎年のように咲き、そのたび「君」への思いを深くしてゆく、それが現代的なさくらの風情である。

昔も今も、人がさくらに心惹かれるのは、春の盛りに咲いてたちまちに散る姿に、移りゆく時はかなさを感ずるからだろう。春に卒業を迎える中学生は、これから先、さくらとともに幾たびかの別れを経験し、時のはかなさを知ること、大人になってゆくのかもしれない。

東野泰子

大阪府生まれ。論文に『奥義抄』から『僻案抄』へ「そが菊」注にみる院政期歌学の様相（『国語国文』）など。共著書に『八雲御抄の研究』正義部作法部（片桐洋一編・和泉書院）、『宴曲索引』（伊藤正義監修・和泉書院）などがある。